

[普及事項]

成果情報名：カシスの枝幹害虫スグリコスカシバに対する生育期の薬剤防除方法

研究機関名 果樹試験場品種開発部

担当者 照井 真・他2名

[要約]

カシスの枝幹害虫であるスグリコスカシバに対して、成虫発生初期の6月上旬にクロラントラニリプロール10.0%水和剤2,500倍液を1回散布することで、樹体内への幼虫の食入を防ぐことができる。

[キーワード]

カシス・枝幹害虫・スグリコスカシバ・クロラントラニリプロール

[普及対象範囲]

県内カシス栽培地域

[ねらい]

カシス(クロフサスグリ)の生産現場で問題となっている枝幹害虫のスグリコスカシバに対しては、被害枝の剪除による耕種的防除が行われているが、食入部位(虫糞排出口)が見つけにくく効果が劣る。そのため、成虫発生期におけるクロラントラニリプロール10.0%水和剤の防除効果を明らかにする。

[成果の内容及び特徴]

- 1 秋田県内陸南部でスグリコスカシバ雄成虫は、6月上旬から7月上旬まで発生する(図1)。食入した幼虫は枝の中で越冬し、翌春羽化する。
- 2 スグリコスカシバ幼虫に対して、クロラントラニリプロール10.0%水和剤(商品名：サムコルフロアブル10)2,500倍の殺虫効果は高い(表1)。
- 3 本種成虫の発生初期(秋田県内陸南部では6月上旬)に、クロラントラニリプロール10.0%水和剤2,500倍の1回散布で、幼虫の食入を阻止できる(表2)。

[成果の活用上の留意点]

- 1 サムコルフロアブル10は、作物名「ふさすぐり」、適用病害虫名「スグリコスカシバ」、希釈倍数「2,500倍」、使用時期「収穫前日まで」、使用回数「3回以内」で農薬登録(2020年2月26日付で登録拡大)されている。
- 2 散布後に幼虫の食入(虫糞の排出)が認められた場合は、耕種的防除として被害部位を切除し適切に処分する。

[具体的なデータ等]

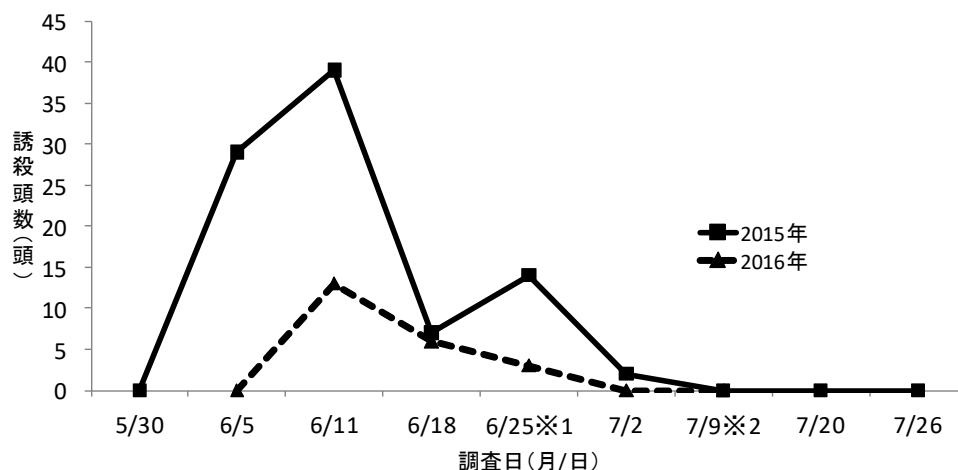


図1 スグリコスカシバ雄成虫の性フェロモントラップへの誘殺消長(2015、2016年)

秋田県湯沢市の現地カシス園(5a、120本植え)に、性フェロモン(試作品)を地上約1mの高さで樹間に設置し、誘殺頭数を調査した。設置は2015年は5月15日、2016年は5月31日に行い、2015年は7月26日、2016年は7月9日まで調査を行った。

※1：2015年は6月26日に調査 ※2：2015年は7月10日に調査

表1 スグリコスカシバ幼虫に対するクロラントラニリプロール10.0%水和剤2,500倍の防除効果(2014年)

区	調査 個体数	生存率(%)			対無処理比 (11/7)
		10月27日	10月30日	11月7日	
処理区	30	43.3	20.0	16.7	18.5
無処理	30	100	93.3	90.0	100

2014年10月2日に秋田県湯沢市現地から採取した被害枝からスグリコスカシバ幼虫を取り出し、室内で人工飼料(インセクタLF)により飼育し、同年10月23日にクロラントラニリプロール10.0%水和剤2,500倍液を処理した。処理は、濾紙を敷いたシャーレ上に薬液を染み込ませた脱脂綿を置き、その上に虫体を静置した。その後、濾紙および脱脂綿は敷いたままで3～4日おきに幼虫の生死を観察した。生存率は(供試個体数－(死虫＋苦悶虫))÷供試個体数×100として求めた。

表2 スグリコスカシバに対するクロラントラニリプロール10.0%水和剤2,500倍の防除効果(2015年)

区	供試 樹数	被害 樹数	調査新梢数 (本/樹)	被害新梢率 (%)	対無処理比
1回処理区	6	0	29.0	0.0	0
2回処理区	6	0	33.0	0.0	0
無処理	6	5	30.1	11.7	100

試験場所：秋田県湯沢市現地カシス園、供試品種：ボスコープジャイアント(自根、1年生、ポット植え)。1回処理区は2015年6月11日、2回処理区は同年6月11日と26日に1樹あたり約1Lを散布した。同年7月30日に1樹ごとの新梢本数と虫糞排出箇所数を調査。

なお、試験は自然発生下で実施した。

[その他]

研究課題名：国産小果樹類の新規市場開拓のための省力生産技術・加工品の開発

研究期間：平成25年度～平成28年度

予算区分：受託

掲載誌等：東北農業研究第70号(2017)